愛知・名古屋アジア大会で授与されるメダルと聖火リレーで使われるトーチが11日に発表された。アジアの一体感を表現したメダルと、地元・愛知の技術力が盛り込まれたトーチ。制作に関わったデザイナーやスタッフが大会に向けた思いを語った。

アジア大会

Aichi-Nagoya 2026

明るく強く 祭典彩る

メダル 多様性を映す

志波大輔さん

「スポーツを通じて異なる地域の人たちの気持ちが一つになってほしい」。メダルのデザインを手がけた志波大輔さん(40)＝大阪府＝はそう口にする。

複数の破片を組み合わせたようなデザインは、大会スローガン「IMAGINE ONE ASIA（イマジン・ワン・エイジア）」ここで、ひとつに。」から着想を得たという。

メダルは直径8センチ、厚さ5ミリ。制作では、メダルとほぼ同じ大きさのセラミック製の円板を何度も落としたり、ハンマーでたたいたりして割り、美しい形状を追求した。破片には、何度も挫折や苦悩を経験しながら努力を重ね、メダル獲得を目指す選手たちへの思いも託している。

メダルの素材の一部は小型家電を回収して取り出した金属を活用。メダルのリボンには、愛知県の花「カキツバタ」をイメージした模様を採用した。11日のイベントに登壇した志波さんは、平滑な部分や凹凸のある部分など複数の表面加工を採用することで「多様性を表現した」と話した。（牧野良実）

「スポーツ通し気持ち一つに」

デザインが発表された愛知・名古屋アジア大会の（左から）銀メダル、金メダル、銅メダル